

「テロとは何だ」

3班

福井翼・久保美和・水野慎也・瀧川仁
健・敦賀一平・植松恵・山本幸子・横江
賢一郎・吉鷹香菜

I 序論

今回のセミナーを通して、私たちはテロの定義が明確でないことに興味・関心をもった。テロには統一された定義がないので、私たちに定義づけることが出来ないか、と考えた。定義が確立されなければ、テロ問題に接近することが出来ない。そこで、私たちはテロの定義を確立することでテロの本質を理解しようと試みた。

まず、各々の持っているイメージから暫定的な定義を作り、次に、実際に使われている定義と比較し、考察した。それからもう一度、あらかじめ作った定義を見直し、私たち独自の定義を作成した。その後、今私たちが身近なところから実際に行動を起こせることは何であるかを検討する。

II 本論

1. 私たちが持っていたテロのイメージ

はじめに、テロに対する純粋なイメージを挙げていった。例えば、計画性、不意打ち、少数派からの抵抗などである。下記は、講師の方々の講演を聴いた上で、先に挙げたような各々の持っているイメージから作成した暫定的な定義である。

- 特定の信念をとおすために国際社会にそむき、無差別に殺人をおこなうこと
- マイノリティのための暴力による自己主張手段
- テロとは、表現方法を特定しない、またそれによる被害をいとわない自己主張の形である
- 自らの政治的・宗教的信念を表現するため一般市民に恐怖心をあたえる暴力行為
- あるひとつの理念に基づき、ある個人もしくは団体が彼・彼らの利己的・自己中心的な目標・ゴールを達成するために精神的・肉体的暴力を行使し、人間の人権・安全を脅かす行動
- 暴力を利用した自己主張の表現
- テロとは、市民への無差別攻撃により自己の主義を正当化しようとする組織的行為である
- テロとは、暴力組織による反体制行為である
- テロとは、自己の力ではどうにもできない不満をわかってほしい思いからおこるもの
- ドラマ化された暴力
- 着色された暴力
- 操作された事実

これらから、私たちのイメージにも多くの共通点があることが分かった。しかし、これらは私たちの偏ったテロに対するイメージに過ぎない。

2. 定義の比較

次に、どのような「テロの定義」がなされているのか、どういった枠組みで表現されているのかを考えた。そこで、実際に使われている定義を参考にしてみた。

定義例

テロリズムとは「①政治目的のために、暴力あるいはその脅威に訴える傾向。またはその行動。暴力主義。テロ。②恐怖政治」
広辞苑より

国家でない団体、もしくは地下活動員による計画的で政治的な動員をもつ非戦闘員を目的とした暴力。通常事件を見守る一般の人々に影響を及ぼす狙いを持っている。

米国国務省より

「テロ」について国際的に確立された定義は存在していませんが、一般的には、特定の主義主張に基づき、国家等にその受け入れを強要し、又は社会に恐怖等を与える目的で行われる人の殺傷行為等をいうものとされています。

※本情報は、このようないわゆる「テロ」に該当するか否かにかかわらず、社団法人海外邦人安全協会が、外務省から提供された平成17年12月末現在の情報等に基づき、海外に渡航・滞在される邦人の方々の安全確保のための参考資料として編集されたものであり、外務省の政策的な立場や認識を反映するものではありません。

外務省「海外安全ホームページ」より

上記の定義を検討した結果、矛盾や疑問点を見出した。具体的には、広辞苑では「テロリズム」の説明として「テロ」を挙げるなどのトートロジーが見受けられる。また、米国国務省においては、テロを起こすのは「国家でない団体、もしくは地下活動員」と定義されており、国家によるテロを排除している点に疑問を感じた。なぜならば、今後国家テロの可能性は否定できないからだ。これら疑問点の他に気になる点として、日本の外務省の『海外安全ホームページ』と、アメリカの『米国国務省』の記述を比較したとき、日本の記述はかなり漠然とした曖昧な表現であるのに対し、アメリカの記述は、より具体的であることが挙げられた。

これらの点と、私たちが始め抱いていたイメージと照らし合わせ、必要なもの、必要でないものを再考することで、得られたキーワードは計画性・暴力・理念の正当化・自己主張の表現・政治的目標であった。以上のキーワードを残したのは、実際に使われている定義と共通点があり、また、テロの要因としても重要であるという結論にいたった為である。これらのキーワードをもとに定義の作成を行った。

3. グループ3の定義

自分たちのイメージから作成した定義と、他の定義を比較し、討議を行った結果、私たちが得た「テロの定義」は以下の通りである。

「ある理念及び、それに基づいた政治的目標を世論に訴え、達成する為に計画的暴力を行使する事」

4. 自分たちに何ができるか

確かに、テロは悲惨な被害をもたらすものであり、テロを減少させる試みは絶え間なく続けられるべきであろう。そこで、私たちにできることは何かについて議論を進めた。ハッサン先生の話をお聴いて、一番危険なことは、無関心になってしまうことであるということに改めて痛感した。それを防ぐためには、学習意欲を持ち続けることが重要である。そして、学んだことを一般の人々に伝え、関心を持ってもらうことが私たちにできることではないだろうか。

具体的に提案された内容は、インターネットを通じた情報の発信や、文化交流による異文化間の相互理解を深めることなどである。

III 結論

討論を深めるまでのテロに対するイメージは、偏った見方によるものであった。テロリズム・テロリストが発生するさまざまな原因を学ぶに従い、テロを本質的に理解することの必要性を感じた。そこから私たちのグループは、テロの定義づけを試みるにいたったのである。その過程で、何よりも大切であるのは「テロ」という問題を、他人事として考えるのではなく、国境・人種・宗教の壁を越えて相互の理解を深めることであると、改めて痛感した。

このような社会を実現するために私たちは、偏見に陥ることなく、主体的に考え、また、さまざまな価値観の人と関わりを持ち、相互の理解を深めなければならない。そうすることによって、直接的で、確実な方法ではないが、より世界を身近に感じ、国際協力を強め、テロの原因を1つでも解決してゆくことができるに違いない。